

小学校国語科教材とジェンダー

Elementary School Textbooks (Japanese) and Gender

牛山 恵

USHIYAMA Megumi

1. 研究の趣旨

国語科の教科書教材は、言うまでもなく「言語の教育」を成立させるための学習材として使用されるものである。しかし、言語の学習、とりわけ「読むこと」の学習は、言語が表現する内容面と無関係には成立し得ない。したがって、国語科の教材は、その学習を通して、児童のものの見方や考え方に影響を与えることになる。国語学習の目標とは無関係に、「隠された（隠れた）カリキュラム」^(注1)が機能して、性別役割意識の形成をうながすことになるのである。本研究は、そのようなはたらきを持つ国語科教材の問題を、ジェンダーの視点から明らかにすることを意図するものである。すなわち、現時点における小学校国語科教科書所収の「読むこと」（読解・読書）の教材をジェンダーの視点から分析する。そのことで、識閲を越えて児童の性別役割意識を形成する国語教材の問題を明らかにしようとするものである。

2. 主要な登場人物の性別による教材の分類

平成16年度使用の小学校国語教科書は、大阪書籍、学校図書、教育出版、東京書籍、日本書籍、光村図書の6社が発行している。各社につき「1年上」から「6年下」まで12冊、6社合計で72冊を教材分析の対象とする。

国語の教科書は、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」、「言語事項（漢字）」の領域で構成されている。そのうち、「読むこと」の教材は「文学」と「説明文」の2系列から成っている。今回、研究の対象とするのは「文学」であり、その中でも、物語、童話、小説を取り上げることとする。

教科書（平成16年度使用）に収採された教材（物語、童話、小説）を、主要な登場人物の性別、つまり、「主要な登場人物が男性の教材」「主要な登場人物が女性の教材」「主要な登場人物の性別が不鮮明、あるいは性別のない教材」の3類に分類すると、以下の表のようになる。

光＝光村図書 教＝教育出版 学＝学校図書

大＝大阪書籍 東＝東京書籍 日＝日本書籍

【 主要な登場人物が男性の教材 】

	作 者	教 材 名	所取出版社
一年上	はそべただし やぎきせつお ロシア民話 (未確認)	おむすびころりん けむりのきしゃ おおきなかぶ たぬきのじてんしゃ	光 教 学・教・光・大・東・日 学

一 年 下	アーノルド・ローベル おかもといちろう かさのゆういち かわむらたかし かんざわとしこ こいけたみこ こいでたん こうやまよしこ ジャック・キーツ なかがわりえこ ハンス・ウィルヘルム まつのみさこ	お手がみ はんぶんずつ すこしづつ ぼくんちのゴリ 天にのぼったおけや ぴかぴかのウーフ ねずみのおきょう ゆきの日のゆうびんやさん はじめは「や!」 ピーターのいす くじらぐも ずっと、ずっと、大すきだよ ふしぎな竹の子	教 大 光 大 大 日 東 学 日 光 光 学
二 年 上	アーノルド・ローベル いわさききょうこ かんざわとしこ かんざわとしこ 金恵京 みやかわひろ みやにしたつや やざきせつお やましたはるお レオ・レオニ	お手紙 かさこじぞう くま1ぴき分はねずみ百ぴき ちょうちょだけになぜなくの とらとふえふき クロはぼくの犬 ニャーゴ うしろのまきちゃん 手紙をください スイミーお手紙	大・日 大 学 学 教 大 日 東 教 東 光 光 教
二 年 下	アーノルド・ローベル あまんきみこ いわさききょうこ おおつかゆうぞう ごとうりゅうじ まつたにみよこ 森山京 レオ・レオニ	お手紙 きつねのおきやくさま かさこじぞう スーホの白い馬 草色のマフラー 三まいのおふだ いいものもらった アレクサンダとゼンマイねずみ	教 教 ・ 東 ・ 日 ・ 大 光 日 光 大 教
三 年 上	あまんきみこ あまんきみこ アンナ・ヴァーレンベルイ 大野允子 長崎源之助 李錦玉 李慶子	おにたのぼうし 白いぼうし 大きな山のトロル 母さんの歌 ガラスの花よめさん 三年とうげ テウギのとんち話	教 日 学 大 日 光 東 学
三 年 下	緒島英二 川崎洋 川村たかし 斉藤隆介 ジュディス・ボースト ジョイ・コウレイ スーザン・パーレイ ハーウィン・オラム ホンシュンタオ 三木卓	海の光 わにのおじいさんのたから物 サーカスのライオン モチモチの木 ぼくはねこのバーニーが大好きだった 大砲の中のアヒル わすれられないおくりもの アナグマの持ちよりパーティ マーリャンとまほうの筆 のらねこ	学 東 光 ・ 日 東 学 教 日 大 教
四 年 上	あまんきみこ アリス・マクラレーン 岡田喜久子 尾崎英紀 川村たかし 西村まり子 舟崎靖子 村田稔 レン・ダーリン	白いぼうし 小鳥を好きになった山 海、売ります あ・し・あ・と・ 雨の夜のるすばん ポレポレ やい、とかげ ともに生きたい チイ兄ちゃん	学 学 ・ 光 日 東 大 学 教 大 日

四年下	小林豊 テリー・ジョーンズ 新美南吉 松谷みよ子	世界一美しいぼくの村 風のゆうれい ごんぎつね 海にしずんだおに	東 大 学・教・光・大・東・日 日
五年上	石井睦美 柏葉幸子 宮沢賢治 宮本輝 あまんきみこ	五月の初め、日曜日の朝 父さんの宿敵 注文の多い料理店 手紙 おはじきの木	学・教 東 大 大 教 学
五年下	長崎源之助 マーガレット・マーヒー 宮沢賢治 椋鳩十	父ちゃんの罫 魔法使いのチョコレートーキ 注文の多い料理店 大造じいさんとがん	学 日 東・学 学・光・大
六年上	安房直子 いぬいとみこ 今西祐行 杉みき子 高橋正亮 宮沢賢治 森忠明	青い花 川とノリオ ヒロシマのうた あの坂をのぼれば ロシアパン やまなし ふたりのパッパ	学 教・日 東 東 学 学 光 日
六年下	安房直子 いぬいとみこ 立松和平 ビル・マーティン・ジュニア	きつねの窓 川とノリオ 海の命 青い馬の少年	教 大 光・東 日

【 主要な登場人物が女性の教材 】

一年下	いまえよしとも かどのえいこ きしなみ	うみへのながいたび サラダでげんき たぬきの糸車	教 東 光
二年上	あまんきみこ 杉みき子	ひつじ雲のむこうに コスモスさんからお電話です	学 大 東
二年下	あまんきみこ	名前を見てちょうだい	東
三年上	岡田淳 長崎源之助	消しゴムころりん つり橋わたれ	教 学・大
三年下	あまんきみこ 七尾純 松谷みよ子	ちいちゃんのかげおくり がんばれわたしのアリエル やまんばのにしき	光 大 大
四年上	今西祐行 サリー・ウィットマン ルシール・クリフトン	一つの花 とっときのとっかえっこ 三つのお願い	教・大 東 光
四年下	今西祐行	一つの花	光
五年上	石井睦美 岡田淳 ポール・ジェラティ ローラ・インガルス・ワイルダー	新しい友達 チョコレートのおみやげ ちかい プラム・クリークの土手で	光 学 東 光
五年下	ジェイン・ヨーレン 杉みき子	月夜のみみずく わらぐつの中の神様	光 光
六年上	長崎夏海 那須正幹 ミスカ・マイルズ	美月の夢 マコちゃん アニーとおばあちゃん	教 大 学
六年下	谷真介 山本加津子	石になったマーベ きいちゃん	日 光

【 主要な登場人物の性別が不鮮明、あるいは性別のない教材 】

一年上	おかのぶこ こうやまよしこ もりやまみやこ りやまみやこ よだじゅんいち (未確認)	はなのみち どうぞのいす はなび てがみ ちくたくてくはいちねんせい いいものみつけた	光 大 教 東 日 学
一年下	あべひろし こいけたみこ	雨つぶ ねずみのおきょう	教 日
二年上	くどうなおこ もりやまみやこ レオ・レオニ	ふきのとう まど ぼくのだ！わたしのよ！	光 東 学
二年下	あかぎみゆき	コンとピョン	光
三年上	工藤直子 林原玉枝	すいせんのラッパ きつつきの商売	東 光
三年下	岸田衿子 ジェイムズ・マーシャル	りんりんりん 屋根のうかれねずみたち	光 教
四年上	アジアの笑い話	ホジャ物語他	教
五年上	宮沢賢治 宮本輝	おいの森とざる森、ぬすと森 手紙	日 大
五年下	宮沢賢治 木下順二	雪あたり あとかくしの雪	教 日
六年下	清水康行	手話の世界	日

3. 分類した教材の数的バランス

取り上げた教材は、全部で156編になる。上掲の教材のうち、「おおきなかぶ」や「かさこじぞう」、「ごんぎつね」など、複数回教材化されている場合は、その頻度数を数えることとする。各学年毎の教材数は次の表のようになる。

【 主要な登場人物の性別による分類 】

	I 主要な登場人物が男性	II 主要な登場人物が女性	III 性別が不鮮明・性別なし	I・II・III類の合計数	全教材に対するII類教材
1年上	9	0	6	15	0%
1年下	12	3	2	17	18%
2年上	11	2	3	16	13%
2年下	11	1	1	13	8%
3年上	7	3	2	12	25%
3年下	11	3	2	16	19%
4年上	10	4	2	16	25%
4年下	9	1	0	10	11%
5年上	5	4	2	11	36%
5年下	7	2	2	11	18%
6年上	8	2	0	10	20%
6年下	5	3	1	9	33%
計	105	28	23	156	
割合	67%	18%	15%		

I類の教材数は105編。156編中105編は67%になる。II類の教材数は28編。156編中28編は18%になる。III類の教材数は23編。156編中23編は15%になる。I類の「主要な登場人物が男性」の教材数が圧倒的に多いことは一目瞭然であり、II、III類の数値と大きな開きがある。

また、各学年毎のII類教材の割合を見てみると、もっとも多いのが5年上の36%である。しかし、あとはほ

ぼ10~20%台で、I類との開きは大きい。特に、1年上については、主要な登場人物が女性であると判断される教材はなく、よって0%ということになる。

入門期教材となる1年上の教材は、既成の児童文学作品に依存することなく、編集者による書き下ろしも可能であり、現に記名のない教材も見られる。そうであるにもかかわらず、性別から見て、偏りのある教材群になっているのが実情である。

このような数的バランスの悪さは、もちろん、教科書編集の問題だけではない。小学生の教材として提供するのにふさわしい内容を持った、また、教材化するのに適当な長さの児童文学作品が、圧倒的に男子を主要な登場人物とした作品によって占められているのだ。読み手が圧倒的に男子の方が多いとか、読み手がそれを希望しているとかいったことではなく、書き手が男子中心の作品を書いているのである。そこに、女性を特に取り立てて、「学生」に対して「女学生」、「医者」に対して「女医」、「教師」に対して「女教師」、「作家」に対して「女流作家」のような、男性が基本で女性は特殊であるという旧来の男女観を見ることができる。女性を主要な登場人物にすることに“あえて”するというような面倒くささはないだろうか。近代文学にも児童文学にも〈男の、あるいは男の子の物語〉はあふれているのに対し、〈女の、あるいは女の子の物語〉は比すべくもないくらい少ない。このような状況が変わらない限り、教科書教材の改善も見通しが暗い。

今日、教育に携わる者は誰も〈男が中心〉とか〈普遍的なのは男〉などと思っていはいないだろう。しかし、国語の教科書の中で、生き生きと動き回っているのは男子が多く、女子の出番が極めて少ないということになれば、〈男が中心、普遍的なのは男〉ということ認めていることになる。教科書の公共性を考えれば、看過できない重要な問題だ。殊に教科書の編集者は、教科書編集にあたって、少なくともこのような性別に関する数的バランスを意識し、教材の開発に努める必要がある。間違っても、女子は男子中心の作品を読み慣れているけれど、男子は女子中心の作品に慣れていないから、特に女子が活躍する教材を載せることはないなどと考えてはならない。性別に関わる数的バランスを問題にすることは、ジェンダーを克服する上での重要な要素である。たとえば、高等教育や雇用等において、差別され弱い立場にいる者を積極的に取り入れていこうとするポジティブ・アクション（アファーマティブ・アクション）もその例だが、現状を当然のこととせず、そこに問題を見出し、そしてそれを是正していくことが大事なのだ。ジェンダーの克服は、今あるものを見直すことから、そして、そこに問題を見出すことから、地道に行っていくしかない。主要な登場人物が男性である教材ばかりを読まされるということは、男子にとっても女子にとっても不均衡なことに違いなく、それが是正されない限り、国語科教科書は子どもたちのジェンダーの形成に深く関わり、バイアスを生みだすことになるだろう。

4、教材に見られる女性像の分析

数的バランス以上に、ジェンダー形成に深く関わるのは、どのような人物像が提示されるかであろう。ここでは、前記の「主要な登場人物が女性である教材」として取り上げた25本の文学教材を考察の対象とする。まず、各教材について、その「あらすじ」（概要）を紹介し、次にジェンダーの視点からの考察を加えることにする。いささか煩瑣な作業であるが、ここまでの調査を基礎資料として、次章では「主要な登場人物が女性である教材」について、ジェンダーの視点から見た教科書教材の問題点を明らかにしていくことになる。

【 主要な登場人物が女性である教材 】が提示する女性像

①、うみへのながいたび いまえよしとも 一年下 教育出版

〈あらすじ〉 出産のために海を離れた白熊の母さん熊は、子熊の兄弟を連れて海へ帰る旅に出る。「うみだとおもっているほうにむかって、ただただまっすぐにあるく。」旅だ。途中、雄熊から子どもを守り、ようやく海に着く。

〈考察〉 ここに描かれるのは、母熊の出産と子育てのドラマである。母熊は、それを本能というのか、学習したわけでもないのに、水しか飲めない状態で、穴を掘って子どもを生んで育てる。その姿は、生物学的には自然なものであるはずなのだが、人間の出産・子育てから見るとひどく過酷なものに思われる。そこで、母熊の苦労が強調される読み方をすると、母親とはそういうものだという、母性愛を強調することになり、固定的な母親像を創り出してしまう可能性がある。

出産や子育てについては、生命の尊厳を知り、自分自身を愛する心を育てるためにも、子どもたちに伝えるべきことのひとつである。それが白熊であれ人間であれ、困難さを伴うことを伝えるのも必要だ。しかし、少なくとも人間の子育てに関しては、母親一人が負うべき務めではないということも同時に伝えなければならない。母熊の苦労や子を思う愛情に感動することは自然なことだ。それが、固定的な母親像につながるようにするためには、多くの動物の出産・子育てを知り、人間の父親・母親の子育てのようすも知る必要があるだろう。

②、サラダでげんき かどのえいこ 一年下 東京書籍

〈あらすじ〉 りっちゃんはお母さんのために、元気になるサラダを作ってあげることにする。きゅうり、キャベツ、トマトを盛りつけたとき、のらねこがかつおぶしを入れるといいと言う。次に、犬がハム、すずめがとうもろこし、ありがさとう、馬がにんじん、白熊がこんぶを入れるように言う。言われたとおりにすると、今度はアフリカ象が飛行機でやって来て、油と塩をかけ、鼻で混ぜ合わせる。それを食べたお母さんはたちまち元気になる。

〈考察〉 りっちゃんという女の子が、動物たちのアドバイスを取り入れながら、病気の母親のためにサラダを作る話。りっちゃんは女の子だから料理をするわけではなく、また、もともと料理ができるとか得意とかいうわけではない。母親のためという目的のもと、動物たちに援助されながら、目的を達成するのである。ジェンダーの視点から見ると、女子と料理は固定的役割として結びつきやすく、そのことを指導者は考慮に入れておく必要があるだろう。

③、たぬきの糸車 きしなみ 一年下 光村図書

〈あらすじ〉 山奥に住む木こりは、いたずら者のたぬきに罾を仕掛けた。おかみさんは、毎晩、糸車を回すのをのぞいているたぬきをかわいく思っていたので、罾にかかったたぬきを逃がしてやる。冬になって木こりの夫婦は山を下り、再び山へ戻ると、たぬきが糸車を回して糸を紡ぎ、木こり夫婦のために糸の束をどっさり作っている。

〈考察〉 人間と動物の交流を描いている。たぬきの、罾から逃がしてもらったことへの恩返し譚だが、単に金品による恩返しではない。おかみさんから人間の技術を習得し、その技術を生かして山のような白い糸の束を仕上げたのだ。たぬきは、品物ばかりか技術が伝達されたこともおかみさんに示した。ジェンダーの視点から見ると、糸を紡

ぐのは女性の仕事として固定化されているので、固定的役割を示すという問題があるが、その一方で、糸を紡ぐという生産的な技術は、女性によって伝達されてきた。女性の担ってきた役割の重要性を伝えるという評価すべき点もある。

④、ひつじ雲のむこうに あまんきみこ 二年上 学校図書

〈あらすじ〉 仲良しのたけし君が引っ越してしまったために、泣いている「わたし」の元に雲ひつじがやってくる。その子羊に誘われて雲の上に行ってみると、白い原っぱに羊や子どもたちがたくさんいて、たけし君もいる。雲の上から下を見ると、家が、笑っているとオレンジ色、ため息をついていると紫色になることを知る。この体験は「わたし」にとって、心温まる思い出となって残る。

〈考察〉 ジェンダーの視点から見ると、特に問題のある教材ではない。「ひつじ雲のむこうに」という題名だが、悲しいときでも楽しく遊べる原っぱがあるという、夢の場所を想定しているものだ。それが、希望をなくさないようにというメッセージになっている。また、笑いをオレンジに、ため息を紫に象徴したことで、登場人物だけでなく、読み手も自分の気持ちを客観化することができ、成長につながる内容となっている。

⑤、コスモスさんからお電話です 杉みき子 二年上 大阪書籍

〈あらすじ〉 ルミは、もらった風船を持って、コスモス通りを歩いている。茎の伸びたコスモスの花が「苦しい」と言っているのを聞いて、風船を結んであげる。スケッチをしていた絵描きさんと「コスモスさんがありがどうって言ってるよ。」と喜び合う。コスモスつうしんきよくから電話で、お礼に、虹や夕焼けを見せてもらう。一月後、デパートで絵の展覧会があると知らされ出かけてみる。すると、あの絵描きさんが描いてくれたコスモスの中にルミがいる大きな絵が飾ってある。

〈考察〉 ジェンダーの視点から見ると、大きな問題ではないが、コスモスを助けてあげる優しい心や花との取り合わせが、男子には似つかわしくなく女子にふさわしいと、「らしさ」を強調する教材としてとらえられる可能性もある。物語としては、コスモスから電話がかかってくるという不思議な体験をファンタジックに描いたものである。

⑥、名前を見てちょうだい あまんきみこ 二年下 東京書籍

〈あらすじ〉 お母さんに、裏に名前を刺繍してある帽子をもらったえっちゃんは、風に帽子をさらわれてしまう。野原では狐が、畑では牛が、えっちゃんの帽子を取ってしまい、その度に自分の名前に書き換えている。風に飛ばされて七色の林に行くと、大男が帽子を持っている。えっちゃんが「名前を見てちょうだい。」と言っているにもかかわらず、帽子を食べてしまう。牛も狐も逃げ帰るが、えっちゃんは「食べるなら食べなさい。あたしおこっているから、あついわよ。」と言う。すると、体が大きくなって大男と同じになり、今度は「あたしのぼうしをかえしなさい。」と命じる。大男はしぼんでしまい、えっちゃんは帽子を取り返して遊びに行く。

〈考察〉 えっちゃんという女の子の、帽子を取り戻そうとする行動が、狐、牛、そして大男と繰り返される。筋としては単純だが、えっちゃんのあきらめない強さが強調される。所有を示すはずの記名が、それを持った者の名前になってしまうという理不尽なできごとに、幼いえっちゃんは「へんねえ」と言うしかない。えっちゃんは記名を所有の印と認め、だからこそ、狐や牛の名前を見るととまどうしかないのだ。一方、狐や牛は、記名という制度を利用して帽子を手に入れようとする。えっちゃんは手が

出せない。しかし、帽子を飲み込み「名前も食べちゃった。」という大男に対しては、そのやり方が暴力的なものであるから、えっちゃんは怒り、向き合ってひけを取らない。相手がどのような存在であろうと、自分の所有を主張して、「あたしのぼうしをかえしなさい。」と、敢然と命令する。帽子を取り戻すことは、自分の所有権を認めさせることであり、たとえ相手が自分をはるかに越える大きな存在であっても、また、たとえ自分は子どもであっても、自分の権利を宣言していいということだ。ジェンダーの視点から見ると、えっちゃんという幼い女子が、帽子を取り戻すまで、ひたすらに相手を追求する姿勢が評価できる。無力な子どもであっても、腕力や知恵ではなく、心の底から権利を主張することで、理不尽な状況を解決するのだ。元気で、たくましくて、あきらめないで、積極的に困難に立ち向かう姿は、理想的な女子像の一つだと言ってもいいだろう。

⑦、消しゴムころりん 岡田淳 三年上 教育出版

〈あらすじ〉 授業中、さおりは消しゴムを床の穴に落としてしまう。するとやもりが出てきて、落とした消しゴムともう一つの消しゴムをくれる。見ていたはずの隣のゆきひろは見て見ないふりをしていて、さおりにはその態度が気に入らない。紙にゆきひろへのメッセージを書くが、それをやもりのくれた消しゴムで消すと特定の言葉だけが消える。さおりは、本当のことは消えない消しゴムだと思い、「ゆきひろはわたしのことをきらいです」と書くと、「きらい」だけが消える。そのことをゆきひろに伝えようとしたとき、ゆきひろの手が触れて、消しゴムは穴に落ちてしまう。

〈考察〉 さおりは、作文を書き終えた後、消しゴムを転がして遊んでいるような女の子で、時間をかけて作文を書き上げるとか、文章を推敲するとかいった、女子の特性と考えられているようなことはしていない。その点で女の子らしさにとらわれていない。非日常のできごとが、さおりにゆきひろへの好意を自覚させる。見て見ないふりをする気弱な男子と、そのような態度に不満を持ちながらも好意を感じているしっかり者らしい女子と、これもまた、類型的な組み合わせを感じさせるが、少なくとも、女子の男子に対する思いや行動を中心に書かれた教材として、意味を認めるところである。

⑧、つり橋わたれ 長崎源之助 三年上 学校図書・大阪書籍

〈あらすじ〉 母親が病気のために山の祖母に預けられたトッコ。トッコは東京の自慢話をしたため、山の子どもたちに仲間に入れてもらえず、かえって、つり橋を渡れないことではやし立てられる。友達のできないトッコはひとりぼっちだ。さびしくて山に向かって「ママーッ。」と呼ぶ。すると、やまびこがかえってくる。そこに、緋の着物を着た男の子が表れる。その子はトッコの真似をする。トッコは追いかけてながら、いつの間にかつり橋を渡り、山の子どもたちの仲間になることができる。

〈考察〉 母親が病気であること、そのために山の祖母の元に預けられたこと、子どもにとってはとても不幸なことで環境の激変とも言える。弱みを見せたくないというトッコだが、それは心細さの裏返しになっている。たとえば、やまびこであっても声がかえってくる、その反応を嬉しいものと思うほど孤独であったのだろう。トッコがつり橋を渡ったのは、勇気が出たからではない。孤独なトッコにとって、突然現れた、山の精を思わせる少年しかいなかったから、その子を追ったのだ。結果として、山の子どもたちの仲間に入ることができたのだから、着物を着た子は救い主になった。しかし、

つり橋を渡るのはきっかけであって、慣れない環境に順応していくことができたのには、書かれてはいないけれどトッコ自身の困難を乗り越えていく力があつたはずである。ジェンダーの視点から見ると、山の精の出現が気にかかる。また、もしトッコが男子だったら、偶然に難関をクリアするというのではなく、力や知恵を発揮することで、あるいは勇気を出すことで、山の子どもたちの仲間に入ることができたのではないかと思わせる。

⑨、ちいちゃんのかげおくり あまんきみこ 三年下 光村図書

〈あらすじ〉 父親が出征する前日、父母、兄、ちいちゃんはかげおくりをする。ある夜、空襲があり、ちいちゃんは母親と兄からはぐれてしまう。二人を待って防空壕で日を過ごしていた時、みんなの声が聞こえ、ちいちゃんはかげおくりをする。空の上のお花畑の中を、ちいちゃんは笑いながらみんなの方へかけていく。

〈考察〉 まだ幼いちいちゃんが主人公であり、そのことが、ちいちゃんに起こった不幸をいっそう悲惨なものに思わせる。その反動として、反戦や平和を願う気持ちを強く抱かせる。ジェンダーの視点から見ると、ちいちゃんが男の子であっても物語に大きな変化はない。ただ、じっと家族を待つという姿に、女の子らしさを見出すということはあるかもしれない。

⑩、がんばれわたしのアリエル 七尾純 三年下 大阪書籍

〈あらすじ〉 小学校2年生のめぐみは、家族にパピーウォーカーになることを提案する。アリエルと名づけられた子犬を預かって訓練をし、とうとう訓練所に戻す日が来る。

〈考察〉 盲導犬を育成するために、子犬を預かって訓練するパピーウォーカーの話で、特にジェンダーとは関わりがない。しかし、動物の飼育や動物との交流を題材にした作品の登場人物は、男性もしくは男子が多い。女子が主人公というところに意味がある。また、めぐみは、家族の援助を受けながらも、犬の飼育を責任を持って達成する。そこに、行動力と責任感を見ることができる。

⑪、やまんばのにしき 松谷みよ子 三年下 大阪書籍

〈あらすじ〉 やまんばが子どもを生み、体力回復のため村人に餅を要求する。だだはちとねぎそべという男たちが届けることになったが、渋る二人にあかざばんばが道案内をすることになる。途中、男たちは逃げてしまい、あかざばんばが一人でやまんばの小屋へたどりつく。やまんばの申し出で、あかざばんばは21日間手伝いをし、帰るときにはにしきをもらう。生まれた赤ん坊におぶわれて家まで帰ったが、そのにしきは、切って村人に分けても、また元に戻る不思議なしきであった。

〈考察〉 一人で子どもを生んで餅を要求するやまんばと、男が逃げ帰ったにもかかわらずやまんばの元へ行き、そこで手伝いをするあかざばんばと、二人のたくましい女性たちが描かれている。二人はたくましいだけではない。やまんばは「村の人たちにめいわくかけなかったか」「だれもかぜひとつひかねえように、まめでくらすように、おらのほうできをつけてるでえ」と村人を案じ、あかざばんばは「村の人たちに申しわけねえ。おらが食いころされればすむこんだ」と、こちらも村人のために自分を犠牲にすることをいとわない。住むところは山と村と違って、共に、強くしかも思いやりのある二人の女性の生き様が描かれている。ジェンダーの視点から見ると、民話に素材を取っているからなのか、いわゆる“女性らしさ”の粋をはみ出るおおらかな女

性像が描かれている。

⑫、一つの花 今西祐行 四年上・下 教育出版・大阪書籍 光村図書

〈あらすじ〉 戦時中のこと。逼迫する食糧事情の中で、ゆみ子は「一つだけ」と言う母親の口癖を覚えてしまう。出征する父親を見送るゆみ子は、父親のためのおにぎりを欲しがり、無くなってしまっても「一つだけ」と泣きやまない。そこで、父親はコスモスの花をゆみ子に与える。10年後、成長したゆみ子は母親とコスモスの咲く家で暮らしている。

〈考察〉 この教材において、ゆみ子の性別はほとんど問題にならない。幼い子どもが「一つだけ」と言って物をねだる切なさが、飢餓といった戦争のもたらす悲惨さを伝えている。ジェンダーの視点から見ると、4年生では難しいだろうし、また教材論の枠を越えるものだが、ゆみ子の成長の向こうにある母親の人生に思いを寄せたいところだ。戦中・戦後を生き抜いたゆみ子の母親には、歴史的存在としての女性像が見いだせるはずだからである。

⑬、とっときのとっかえっこ サリー・ウイットマン 四年上 東京書籍

〈あらすじ〉 ネリーとお隣のバーソロミューの話。ネリーが赤ちゃんの時、バーソロミューはネリーをカートに乗せて散歩する。ネリーは成長し、バーソロミューは杖を使うようになる。バーソロミューが車椅子を使うようになると、今度はネリーがそれを押して散歩する。ネリーとバーソロミューの関係は、とっかえっこになったのだ。

〈考察〉 ネリーは女子でなくてもいいし、バーソロミューは男性でなくてもいい。そういう意味で性別に関わりのない内容だ。しかし、バーソロミューの子育ては、決してネリーを女の子らしく育てようとするようなものではない。カートに乗ったネリーはでこぼこや水しぶきを楽しみ、不必要な手助けを免れて自立していく。ネリーの成長は、甘やかされずに、できることを楽しみながら問題をクリアしていくものだ。女の子の成長の仕方と男の子の成長の仕方とは、その子どもの力で一步步進んでいくという点では少しも変わらないはずである。だからこそ、バーソロミューの老いは、今度は、一步步後退していく、自然なものにとらえられるのだ。二人の間には年齢の違いだけがあって、それは壁になることがないどころか、それこそが「とっかえっこ」の鍵となるのだ。二人は仲間であり、同志であり、親友である。互いを認め合って、必要な時に自然に援助をする関係だ。ジェンダーから解放されるためには、このような人間関係のあり方を知ることが必要なのではないだろうか。

⑭、三つのお願い ルシール・クリフトン 四年上 光村図書

〈あらすじ〉 ノービィは、1月1日に自分の生まれた年の1セント玉を拾い、三つの願いがかなうという言い伝えを思い出す。初めの願いをつまらなく使ってしまったので、家で、親友のビクターと使い方を話し合う。ビクターといさかいをした結果「帰ってよ。」と言ってしまふ。ビクターは外へ駆け出し、二つ目も終わる。「ママは何をお願いする。」と聞くと、「いい友だち。」と言われる。1セント玉を握りしめて「もどってきてくれないかな。」と言うと、ビクターが走ってくる。

〈考察〉 ノービィとビクターのように、女子と男子が親友という設定が、日本の作品の中にはほとんどない。二人で散歩し、将来も共にいようと考え、三つの願いのことで相談し合う。しかも、幸運を手に入れたのは女子のノービィで、彼女はビクターの脇

役ではない。二人は性別を意識しないで話し合い、けんかをし、互いに「あんな友だちは、なかなかいない。」と思う。このような男女の友情関係をまったく普通であると子どもたちが思うようになれば、ジェンダーの束縛も克服されていくのではないだろうか。

⑮、新しい友達 石井睦美 五年上 光村図書

〈あらすじ〉 仲良しのまりちゃんがロンドンに行くというので、「わたし」はクロッカスの球根をあげる。手紙のやりとりも間遠になった頃、まりちゃんが帰ってくると知らせがある。帰国後、同じクラスに入ってきたまりちゃんは、以前にも増して元気な女の子になっており、そのことを「わたし」は「すなおに喜ぶことができない」でいる。ある日、坂本君に「すごく変だぞ。」と言われる。坂本君は「新しい野中だと思えばいいんじゃないの。」とも言い、「わたし」は気が軽くなって、そのことをまりちゃんに伝え、二人の間のわだかまりは解ける。

〈考察〉 帰ってきた友達が、自分の心配をよそにクラスの中で元気にしていることが、「わたし」にはおもしろくない。「わたしの知っているまりちゃんではないような気がしてしまう。」という言葉の中に、活躍するまりちゃんへの嫉妬や不満が隠れている。その思いを変えたのは坂本君である。坂本君が新しい見方を示したことで、「わたし」はとらわれを脱することができ、まりちゃんとの関係が修復される。「わたし」は、坂本君という外からの働きかけがなければ、問題を解決することができなかった。坂本君との比較において、問題解決できないのが女子で、発想の転換で解決をはかろうとするのが男子というように、見えてこないだろうか。ジェンダーの視点から見ると、自分自身の力で問題を解決せず、外からの提案を受け入れて問題解決をはかった、自立していない女子像が示されているように見えてしまうところが問題である。

⑯、チョコレートのおみやげ 岡田淳 五年上 学校図書

〈あらすじ〉 小学校五年生の「わたし」は、「みこおばさん」と神戸の異人館や港を見学する。休憩でチョコレートを食べたとき、おばさんが「時間がとけていくみたい」と言う。そこからおばさんによる、風船売りとニワトリの物語が始まる。風船売りに嘘をついたニワトリが風見鶏になってしまう話だが、「わたし」がチョコレートを使って結末を作り替える。

〈考察〉 主要な登場人物は「わたし」「みこおばさん」ともに女性だが、作中物語とでもいべき風見鶏の話では、人物はすべて男性である。風船売りの話は、チョコレートの口溶け感を、時間が溶けるといように発想して生まれた物語である。「わたし」と「みこおばさん」は、交互にファンタジックな物語を紡ぎ出していく。ジェンダーの視点から見たとき、特に問題があるわけではないが、二人の存在感は薄い。姪とおばという設定を生かして、「わたし」の視点から「みこおばさん」はどのように見えるのか、それをとらえると女性像に厚みが出たのではないだろうか。

⑰、ちかい ポール・ジェラティ 五年上 東京書籍

〈あらすじ〉 ヤミーナは象を見たいと思っている。祖父とはちみつ取りに出かけ、ハンターのことを聞くと、ハンターになりたいと思う。しかし、祖父とはぐれ、母象をハンターに撃たれた子象を見つける。ヤミーナは子象を連れ、祖父に言われていたように、川向こうの村をめざす。途中、ハンターから隠れ、夜の恐ろしさを体験するが、

ようやく象の群れと出会って、子象を託す。ヤミーナもまた、母親と出会える。

〈考察〉 ヤミーナは、最後に「あたし、ハンターにはならない。」と誓う。体験を通してたどりついた誓いである。この教材は、ヤミーナが男子であっても内容に変化があるとは考えられず、その点で、性別に関わりない内容である。しかし、迷子になって心細いにもかかわらず、子象を救いたい一心で危険な草原を旅するヤミーナは、幼い女の子のイメージではない。祖父から教わった知恵で、子象を群れに戻すところは、男女の性別を越えて、たくましく自立した子どもの姿である。ジェンダーの視点から見ると、女子の類型を免れた行動する女子像である。

⑱、プラム・クリークの土手で ローラ・インガルス・ワイルダー 五年上 光村図書

〈あらすじ〉 ローラは、流れの速いクリークにかかった橋の上から、足を水に入れ、ばたばたさせておもしろがっている。「この楽しそうなクリークの中に、体ごと入ってみたい」と思うようになり、水に入るが、すぐに水の恐ろしさに気づく。体の芯まで冷え切って、ようやく橋の上に体を引き上げることができる。

〈考察〉 水に惹かれて流れに入りたいと思うのは、活動的な男子だけではない。女子もそういう気持ちになることがあるし、ローラのように、実際に入ってしまうこともある。女子にも、冒険心はあるし、無茶をすることもある。それで困っても、ローラは、自力で水と闘い、勝利する。そして、自然の脅威や人間の無力さを知る。また、人間は自然に勝つことができるという自信も持つ。自力で自然と対決したからこそ、自然と人間の関係を学ぶことができたのである。ドラマチックなできごとの中で、ローラの行動や心情がリアルに描かれる。ジェンダーの視点から見ても、生き生きとした、リアリティのある女子像を示すものとして優れた教材である。

⑲、月夜のみみずく ジェイン・ヨーレン 五年下 光村図書

〈あらすじ〉 「わたし」と父親とでみみずくを探しに出かける。「わたし」は、父親の言うことを守り、寒さの中、暗い森を、期待を持って歩き続ける。遂に、父親の呼びかけにみみずくがこたえる。光の中に浮かぶみみずくを見る。

〈考察〉 散文詩だが、その物語性から、ここにとりあげることにする。父親は、兄達と同じように「わたし」のこともみみずく探しに連れて行く。父親は、男子である兄達と女子である「わたし」を差別せず、また、「わたし」も、時期が来ると当然のように、父の後をついて行く。みみずく探しは成長のあかしでもある。みみずくと「わたしたちじっとみつめあった」という瞬間を体験すること、「わくわくするのがすてきなんだ」という気持ちを持つこと、それは女子にとっても、成長の糧になるのである。ジェンダーの視点から見ると、自然との交歓が女子の目を通して語られることに、大きな意味を持つ教材である。

⑳、わらぐつの中の神様 杉みき子 五年下 光村図書

〈あらすじ〉 祖母が、母親とマサエにわらぐつの中に神様がいたという話を聞かせる。働き者のおみつさんは雪下駄欲しさにわらぐつ作りを始める。できあがった不格好なわらぐつを朝市で売っていると、若い大工さんがしげしげとながめた後を買ってくれ、市の度にわらぐつを買ってくれるようになる。その若い大工さんは「心をこめて作ったものには、神様が入っているのと同じこんだ。」「神様みたいに大事にするつもりだよ。」と言って、おみつさんに結婚を申し込む。話を聞いたマサエに、そのおみつさん

が祖母で大工さんが祖父だと明かされる。

〈考察〉 台所で片づけ物をする母親の姿は、台所・家事・水仕事と言った、女性に結びつく仕事の典型であり、ジェンダーそのものだ。しかし、朝市で現金収入を得るために働くおみつさんは、マサエの世代から見ても自立的である。しかも、祖母と祖父の結婚のいきさつが、「使う人の身になって、心をこめて作る」という価値観が両者を結びつけたことにあり、言ってみれば、対等な関係による恋愛結婚である。それを知ることが、マサエにとって幸せなことだ。祖父が祖母を、その仕事を通して認め、そこから愛情が生まれて、互いに結婚を選択したのである。ジェンダーの視点から見ても、行動派のおみつさんと女性を尊重する若い大工さんという人間像が描かれることに、教材の意味がある。

⑳、美月の夢 長崎夏海 六年上 教育出版

〈あらすじ〉 美月は「将来の夢」という課題の作文に、悩みつつ「獣医になりたい」と書く。家に養老院から手紙が届いていて、季節毎に手紙のやりとりをしていた沼田さんの死が知らされる。小学校1年生の時から手紙のやりとりをしていたが、沼田さんの葉書は、いつも「楽あり苦あり、それが人生。美月さんは、富士山のように大きく、たおやかな人になるでしょう」という同じ文面である。「富士山のような人」は、沼田さんのすてきな夢だとわかり、美月は「いろんなものを見て、いろんな人に出会いたい」というのが自分の夢だと確認する。

〈考察〉 葉書のやりとりという老人とのコミュニケーションが、美月の将来の夢と関連させて描かれている。しかし、「いろんな人に出会いたい」という夢は、沼田さんとの関わりを通して思いついたことではなく、作文の課題を見て漠然と考えた「行ってみたいところなら、たくさんある」という思いに戻ったのだと考えられる。沼田さんには沼田さんの夢があったという発見から、自分も自由に考えようと思えたのである。しかし、美月の沼田さんに対する気持ちは不明である。なぜ、いつも同じ文面なのか、「富士山のように大きく、たおやかな人」とはどういうことなのか、美月は尋ねようとはしなかった。沼田さんとの間に、どのような心の交流が生まれていたのだろうか。おそらく、美月にとって沼田さんの存在は希薄だったのだろう。ジェンダーの視点から見たとき、特に性別の問題があるわけではないが、老人との関わりを描いているにもかかわらず、心の交流が見えない教材である。

㉑、マコちゃん 那須正幹 六年上 大阪書籍

〈あらすじ〉 語り手は「わたし」で、マコちゃんというのは同じクラスの大崎真琴のことだ。マコちゃんは、女子のサッカーチームを作ることを提案するような活発で積極的な性格だ。しかし、「わたしが知ってるマコちゃんは、男子にでも食ってかかるような子ども」のはずが、実は、お兄さんの命令で使い走りをしていると知る。マコちゃんの事情を知った「わたし」は、元気のないマコちゃんを見て、「今のマコちゃんの手になってあげられるのは、わたししかない」と思うようになる。

〈考察〉 読み手と等身大の女子が描かれている教材である。「わたし」は、体が大きく、運動が得意で、明るくてはきはきしているマコちゃんには「ちょっとついていけない気がする」と思っている。そのため、サッカーチームに誘われると「ほっといてよ。」と拒絶する。サッカーチームが「三日もしないうちにつぶれてしまった」というとこ

るから、「わたし」以外の女子も、マコちゃんにはついていけないことが暗示される。マコちゃんというのは、憧れの的であると同時に羨望の的であり、群れから抜き出た異質性を持つ存在なのだ。「わたし」にとって、マコちゃんは仲間ではない。「わたし」と「マコちゃん」のコミュニケーションは、初めから対等性を欠いていたのである。

しかし、「男子も一目置いてい」たり、「女子もたよりにしてい」たりする時は敬遠していたマコちゃんが、お兄さんの使い走りをしているということを知り、また、元気がない様子を見ると、俄然、「わたし」の身近な存在になってくる。そして、「力になりたい」「力になってあげられるのは、わたししかいない」と思うようになる。対等になったというより、むしろ立場の逆転が起こり、それが、新たなコミュニケーションの鍵となる。確かに、学級では、このような同情による女子同士のコミュニケーションは少なくないだろう。しかし、それぞれの良さや欠点を認め合った上で対等に成り立つコミュニケーションでなければ、自立した個と個の人間関係とは言えない。「わたし」の変化を、マコちゃんへの理解が深まったとでも読んで、このようなコミュニケーションを肯定するのであれば、それは、女性是对等なコミュニケーションを持つことができないということを具体的に表現しているようなものだ。女性同志が、もっとおらかで豊かなコミュニケーションを成立させているケースはいくらでもある。その点で、問題を抱えた教材であると言えよう。

⑳、アニーとおばあちゃん ミスカ・マイルズ 六年上 学校図書

〈あらすじ〉 ナバホ族の少女アニーは、ネイティブ・アメリカンの村に両親と祖母と四人で暮らしている。農耕と牧畜の生活であり、祖母や母は機織りをし、父は銀の首飾りを作っている。アニーもそろそろ機織りを始める年頃になり、祖母は自分の死が近づいていることをみんなに伝える。母親の織っている絨毯ができあがる頃に大地に帰るといふ祖母の言葉に、アニーは母親が絨毯を織れないようにさまざまな妨害をする。祖母から「時間は戻せない」こと、「生きているものは大地から生まれて大地に帰っていく」ことを教えられたアニーは、「自分も大地の一部」だという「神秘」に触れる。アニーは機を織ることを宣言する。

〈考察〉 ここには、はっきりとした役割分業が描かれている。機織りは代々女性の仕事であり、父親は決してしないし、母親は父親のしている銀細工はしないだろう。女性が子どもを生み乳を飲ませるといふ肉体的必然から、生活上の役割分業は生じた。しかし、アニーがスクールバスを使って学校に行くように、アメリカ西部の広い砂漠にも、生活環境の変化が起きている。アニーの時代は、祖母や母のように、もはや素手で行う農耕や牧畜、そして機織りでは生きていられない。生活の基盤である農耕や牧畜のあり方が崩れ、電気製品に囲まれた生活では、性別役割分業も成り立たなくなる。また、テレビや電話、インターネットなどのメディアの発達で、世界情勢も身近なものになる。アニーが、宇宙飛行士になる可能性があることに気づく日が来るかも知れないのである。ジェンダーの視点から見ると、女性問題を考える上でテーマとされてきたようなさまざまな問題が含まれている教材である。性別役割分業も肯定されている。しかし、生きることの哲学について考えさせるし、祖母・母・アニーと、女性三代の生き方を取り上げることができるという意味でも、教材価値を持つと考える。

②4、石になったマーペ 谷真介 六年下 日本書籍

〈あらすじ〉 昔の話として語られる。マーペは、年下のウダニを弟のようにかわいがり、成長するにつれて、二人は恋人同士になる。しかし、琉球王府の命令で、マーペはウダニと離れて遠くの地へ行かなければならなくなる。日が経つうちに、マーペはウダニが恋しくて、もう一度だけ会いたいと、ウダニの住む方角を見るために、高い山を登り続ける。そしてとうとう、ウダニのいる方を向いた形で石になってしまう。

〈考察〉 民話風の、切ない恋の物語だ。引き裂かれたマーペとウダニだが、マーペのウダニを恋しく思う気持ちの方が勝って、マーペは山に登り、その姿のまま石になってしまう。山の由来ともとれる話だが、このように積極的に恋の行動を起こす女性を、そのことのみで、ジェンダーの視点から見て解放された女性というようにはとらえない。恋の情熱は、時代や制度に関わりなく、また性別を越えて、人にさまざまな行動を取らせるからだ。

②5、きいちゃん 山本加津子 六年下 光村図書

〈あらすじ〉 障害があるために家族から離れて暮らす高校生のきいちゃんと、彼女を見守る教師の話。教師は、姉の結婚式に出ないでくれと言われて傷つくきいちゃんを励まし、姉の結婚の祝いに浴衣を縫うようにすすめる。手の不自由なきいちゃんが浴衣を縫い上げる。きいちゃんと共に結婚式に参列した教師は、浴衣を着た姉が、妹を「私の誇りです。」と紹介するのを聞き、涙が止まらない。

〈考察〉 「きいちゃんはきいちゃんとして生きていくのです。」という教師である「わたし」の主張は、きいちゃんが自信を持つことができはじめて言える言葉である。それは、障害があることを周囲に認められ保護されるということではかなわない。浴衣を縫い上げた達成感と周囲からの理解、それがきいちゃんの成長をうながし、将来の展望を生んだのだ。この教材が取り上げているのは障害者に対する偏見と、障害者自身の生き方の問題であって、性差別の問題とは関わらない。しかし、女性で障害者のきいちゃんは、何重もの差別を受けていると言えるのではないだろうか。きいちゃんの行動、努力、決意は、個人レベルで差別を乗り越えようとするための第一歩である。ジェンダーとは関わらないように思われる教材だが、差別を乗り越える生き方が描かれている点で、女性差別の問題とも重なりを見せている。きいちゃんの場合と同様に、その人自身が人に依存せず自力で何かを達成すること、「わたし」や姉のような支援者がいることが、さまざまな社会の差別状況を乗り越える道となることを示唆している。

5、ジェンダーの視点から問う教材価値

25編の教材をジェンダーの視点から分析した結果、各教材の問題点、あるいは評価すべき点などが明らかになった。そこで、共通項を設けて教材をグループ化し、それぞれの問題点、評価点を問うことにする。

A、性別役割分業が描かれているもの

教材	①、うみへのながいたび	…母親と育児
	②、サラダでげんき	…女子と料理
	③、たぬきの糸車	…女性と糸紡ぎ
	⑪、やまんばのにしき	…産後の看護と家事

②③, アニーとおばあちゃん …女性と機織り

②⑤, きいちゃん …女性と和裁

このグループについては、誤解を生じやすいので、初めに述べておくと、「性別役割分業」が、どんな場合においても問題だということではない。たとえ、それが、男性の役割・女性の役割として固定化されていたとしても、時代によって、生活形態によって、一概に否定できるものではないからだ。しかし、扱い方によっては男性・女性それぞれの生き方を拘束してしまう可能性を持っている。ここでは、そういう意味で問題となる要素を含むものとして、取り上げているのである。

上記教材のうち、たとえば、「うみへのながいたび」の母熊が出産・育児をするのは、そしてその方法は、生物学的にまったく自然なことである。それが社会的に作られた性の特性ではないことから、こうして取り上げることに違和感があるかもしれない。その点では、「サラダでげんき」も、病気の母親のためにサラダを作るというのが主たる内容であるから、決して、料理は女子の役割だと決めている教材ではない。女性の仕事として固定化されたものが出てくるのは、「たぬきの糸車」の糸紡ぎと「アニーとおばあちゃん」の機織り、「きいちゃん」の和裁である。これらは、家の中で行う仕事ではあるが家事とは言えず、いずれも技術を必要とし、自家用の他に、現金収入を得るための商品を生産するものでもある。女性にとっては数少ない職業につながる仕事である。その意味では、布に関わる仕事は、歴史的に見て、女性の経済力を裏付ける大事な生産活動だったわけで、その重要性を認めないわけにはいかない。しかし、今日のように、女性の職業選択が自由に開かれている時代にあっても、仕事と性別の結びつきが強いものについては、それを根拠として選択にブレーキがかかる可能性がないわけではなく、そのことが問題になるのである。

「やまんばのにしき」は、あかざばんばが、やまんばの産後の看護や家事を行うことが女性という性に結びつくものとして取り上げた。この教材については、ジェンダーの視点から見ても、やまんばとあかざばんばという二人の考え方や行動が、いわゆる「女性らしさ」を越えるものとして高く評価できる。もちろん、産後の回復期には、女性にとって女性の看護者が望ましいということもあろうし、また、一人暮らしのやまんばには、たまたまやって来たあかざばんばしか看護や家事を頼めなかったという事情もあろう。それらを考慮した上でも、産後の看護や家事は男性でもできるという点から、Aグループに分類したものである。

以上、Aグループに取り上げた「性別役割分業が描かれている」教材は、だからといって教材に大きな問題があるという教材群ではない。しかし、性別役割分業を固定化してしまうような、つまり、機織りは女の仕事で男がするものではないとか、やっぱり料理は女がするものだとかの、役割を性別で固定化してしまうことを肯定する考え方につながってしまう可能性が皆無だとは言えない。そこで、これらの教材を扱うときには、教材に描かれている役割と性別が、今日では固定的ではないという認識を持ち、子どもたちにもそのことを意識させる必要がある。ジェンダー形成は些細なことにもその要因があるからだ。教材自体の意味や価値はまったく別の所にあっても、指導者が意識的でなければ、思いもかけないバイアスを生み付けることになるかもしれないのである。

B、女性のコミュニケーションの描き方に問題があるもの

教材 ②②, マコちゃん …女子同士のコミュニケーションのあり方

今回の教材分析において、もっとも問題性があった教材である。

「そりゃあ、私だって、マコちゃんみたいになりたいと思うことがある。」という冒頭から、「わたし」がマコちゃんをおもしろく思っていないことが語られる。マコちゃんに対する羨望と嫉妬、自分自身に対する卑下、そしてどこかでマコちゃんを異質な存在と感じ、その異質性をとがめるような言葉が連ねられる。それが「わたし」のマコちゃんに対する「敬遠」の中身であろう。そして、この「わたし」の複雑な思いに、読み手、中でも女子の読み手は共感を覚えるのではないだろうか。なぜ、そう予想するかと言うと、小学生の意識に関するアンケート調査（注2）からそう見えてくるものがあるからだ。

アンケート調査によると、女子は男子と比べてさまざまなことに悩んでいることがわかる。すなわち、「勉強や成績のこと」に36.2%（括弧内は男子：32.4%）、「顔かたちやスタイルのこと」に28.2%（8.4%）、「自分の性格のこと」に27.2%（17.2%）、「友だちのこと」に26.8%（2.1%）というように、女子は、ほぼ30%の割合で悩んでいるのである。マコちゃんに対する「わたし」の複雑な気持ちの背景に、調査結果に見られるようなさまざまな悩みを想定することは容易だ。また、筆者自身は、「小学生・中学生・高校生のコミュニケーション意識に見られる男女の差異」（注3）において「男子に比べて女子の方が、仲間意識に支えられて積極的なコミュニケーション意識を持ってはいるが、そこに本当の人間関係ができていない」と言い難い」と述べたことがある。この教材の場合、「わたし」にとって仲間意識が持っているのはメグちゃんであるが、今、二人のコミュニケーションについて問うことはしない。問題は、「わたし」のマコちゃんに対するコミュニケーション意識である。「わたし」はマコちゃんを敬遠している。仲間意識を持ってないからだ。しかし、同じく筆者の調査（注3に同じ）によると、女子の69.1%（50.6%）が、「お互いに遠慮なく話し合いたい」という、心からの親密なコミュニケーションを望んでもいる。おそらく「わたし」も、マコちゃんに対して、心の底ではコミュニケーションを望んでいたのだろう。

読み手は、等身大の「わたし」に共感を持ち、マコちゃんへの敬遠を理解するはずだ。しかし、本屋で見かけたマコちゃんの姿と、メグちゃんからの情報で、「わたし」のマコちゃん像がこれほど簡単に変化することを、理解するだろうか。マコちゃんの境遇に劇的変化が起きたということが書かれていない以上、変わったのは「わたし」のマコちゃんに対する見方になる。また、読み手は、「わたし」がマコちゃんに対する敬遠を解いた理由を納得するだろうか。これでは、「わたし」は、勝手にマコちゃん像を描いて敬遠し、今度は勝手にマコちゃん像を変えて「今のマコちゃんの力になってあげられるのは、わたししかない。」と考える、自己中心の浅はかな女の子になってしまう。こういう「わたし」に、読み手は自立した人間としての共感を持たないのではないだろうか。このような関係は「お互いに遠慮なく話し合いたい」という望みが成立する関係ではないからである。

「わたし」は、マコちゃんに対する自分の思い違いに気づくか、もしくは敬遠の無意味さに気づいて、「ちょっとついていけない気がする。」マコちゃんであっても、コミュニケーションを結ぶ努力をすべきである。そういう「わたし」像が描けないとしたら、書き手の中に「女子のコミュニケーション」についての固定観念があるからではないだろうか。

C、女性の問題解決能力を認めていないもの

- 教材 ⑧, つり橋わたれ …着物の子どもによる問題解決
⑮, 新しい友達 …男子の介入による問題解決

Cグループの二つの教材については、「女性の問題解決能力を認めていない」という共通項でくくったが、評価が同じというわけではない。

「つり橋わたれ」は、孤独なトッコだったからこそ、山に向かって呼びかけ、それに応じて現れた山の精を思わせる少年を追うのである。その結果としてつり橋を渡り、山の子どもたちの仲間に入ることができる。山に向かって呼びかけるという行為を、孤独な環境から脱するための積極的行為だと認めるなら、トッコは自ら問題解決にあたったと言える。しかし、山びこは自分自身の投影であり、トッコは自分の新しい環境や新しい仲間に向き合おうとしているわけではないのだ。着物の少年は、トッコの新しい生活を開く救いの神であったが、その出現によって、結局、トッコ自身は積極的に問題を解決しようとしないうまま、何とかなってしまったのである。この成り行きは、書き手の、少女に対する優しさの表れには違いないが、裏を返せば、トッコには自分自身で山の子どもたちと向き合う力がないとしてしまうことでもある。女性像として、頼りないばかりだ。

「新しい友達」は、Bグループにもつながる女子のコミュニケーションを扱った教材だ。「わたし」は、まりちゃんが転校することを三日前まで黙っていたことに、かすかに不満を持ったに違いない。なぜなら、そういう大事なことを共有するのが仲間だからだ。しかし、別れに際しては、二人の関係が途切れないことを象徴するような球根を贈る。その球根は二人を繋ぐ役目をするはずだったが、時間は別々に過ぎていき、手紙もその流れに逆らえない。「わたし」には、球根が花を咲かせるほどに変化したことを目で確かめたにもかかわらず、自分たちの変化を確認することができない。友情とか仲間意識とかが、相手の現実を受け入れることで成り立つのなら、まりちゃんが帰国したときに違和感を感じることはなかったのに、「わたし」はそうではなかった。「新しい友達」の問題の一つが、ここにある。女子の友情が、相手をそのまま受け入れることではなく、自分の思いに当てはめて受け入れるような自己中心的なものとして描かれていることだ。女子のコミュニケーションをそのようにとらえているとしたら、書き手のバイアスである。

もう一つの問題は、まりちゃんとの関係修復のきっかけが男子の言葉にあることである。男子である坂本君は、二人の関係を客観的で的確にとらえている。アドバイザーは女子であってもよかったはずなのに、男子を配したところに、書き手の持つ「冷静さ」「判断力」「客観性」「優しさ」などの“男らしさ”観が見られる。このことは、坂本君のアドバイスにも表れている。坂本君は、まりちゃんを受け入れがたくて悩む「わたし」に、まりちゃんを「新しい野中」と思うよう、発想の転換を示した。第三者のアドバイスが膠着した状況に道をつけることはよくあることだ。しかし、「わたし」は自分の気持ちと向き合うことなく、まりちゃんに対する気持ちの雪解けに喜ぶ。その「わたし」に、まりちゃんは「あたしはあたしだし、ひろはひろでしょ。ほかの人にはならないと思うよ。」と言う。「新しい」別人ではなく、変化を受け入れることの大事さを言っているのだ。まりちゃんのこの言葉を受けとめなければ、友情の長続きはない。書き手はそのことを認識している。しかし、物語は「二人のまりちゃん」を肯定して閉じていく。

「わたし」の違和感、友情への懐疑は、そんなに簡単に消え失せるものではない。「わた

し」の人間像が甘いから、リアリティーを持ち得ないのだ。

D、女性像の描き方が不十分であるもの

- | | | |
|----|---------------|-----------------|
| 教材 | ⑫、一つの花 | …母親の存在感が希薄 |
| | ⑯、チョコレートのおみやげ | …子どもと大人の書き分け不鮮明 |
| | ⑳、美月の夢 | …美月の人物像が不鮮明 |

Dグループは、ジェンダの一問題がある教材群ではないが、女性像という観点からは人物がとらえにくい。中でも、「美月の夢」は、女性像というより、どのような人間を描きたかったのかということさえ明らかではない。

E、“女らしさ”のイメージが教材のイメージとなっているもの

- | | | |
|----|-----------------|--------------|
| 教材 | ④、ひつじ雲の向こうに | …女の子の優しい世界 |
| | ⑤、コスモスさんからお電話です | …女の子の優しい世界 |
| | ⑨、ちいちゃんのかげおくり | …女の子ゆえのいじらしさ |
| | ⑳、石になったマーペ | …女性の恋 |

Eグループは、「石になったマーペ」を除いて、幼さの残る女の子が主要な登場人物であるため、女性であることが物語のイメージを作っているのか、それとも幼さが作っているのかが明確ではない。しかし、もしも主要な登場人物が男の子だったらと仮定すると、物語のイメージはかなり大きく変わるだろう。そういう点では、いわゆる“女の子らしさ”のイメージによって、柔らかで優しいイメージを作り出しているとも言える。そうかといって、そのイメージは漠然としたものであり、ジェンダー形成に関わるといった問題を持つものではない。

「石になったマーペ」はこのグループの中では異質である。マーペの場合、女性というジェンダーではなく、激しく恋をする人なのであり、そこに女性観を見るときは、恋しさのあまり過激な行動をとるのは女性であるということになるだろうか。

F、ジェンダーを越える女性像が描かれているもの

- | | | |
|----|----------------|---------------|
| 教材 | ⑥、名前を見てちょうだい | …追求する女子像 |
| | ⑦、消しゴムころりん | …逸脱する女子像 |
| | ⑩、がんばれわたしのアリエル | …行動する女子像 |
| | ⑪、やまんばのにしき | …人間愛を示す女子像 |
| | ⑬、とっときのとっかえっこ | …異質性を受けとめる女子像 |
| | ⑭、三つのお願い | …友情を育む女子像 |
| | ⑰、ちかい | …生命に目覚める女子像 |
| | ⑱、プラム・クリークの土手で | …自然と向き合う女子像 |
| | ⑲、月夜のみみずく | …冒険する女子像 |
| | ⑳、わらぐつの中の神様 | …仕事を持つ女子像 |

Fグループこそ、ジェンダーの視点から見たとき、望ましい女性像や女性のコミュニケーションが描かれた教材群である。10編取り上げることができたが、そのうち5編は外国作品である。また10、20の2編は、積極的にジェンダーを越える女性像を示しているわけではないが、ある意味で新しい女性像であるということで、Fグループに分類している。

「名前を見てちょうだい」のえっちゃん、帽子を取り戻すことにおいて果敢である。幼さゆえに腕力も、また、強者を相手に立ち向かえるような知恵もない。あるのは、ひた

すら自分の帽子を取られることの理不尽さに対する怒りである。取り戻そうとする情熱である。幼い女の子であるからといって、誰の助けもない。自分自身の力で、目的を達成する。それは、あくまでも自分の権利を追求する女子像である。

「消しゴムころりん」のさおりは、これまでの女子に対するイメージを裏切るものである。強い女の子と弱い男の子という組み合わせは、ある意味では類型化しているともとれるが、女子の方から男子を見る視点で書かれた作品はそう多くはない。さおりの、望ましい女子像を破るリアリティーに、逸脱する女子像を見ることができる。

「がんばれわたしのアリエル」のめぐみは、盲導犬を育てるという社会的目的を持ってパピーウォーカーになる。そのことだけで、この教材はFグループに分類することができる。この教材のように、行動する女子像が登場することは実に少ないのが実情である。

「やまんばのにしき」は、Aグループでも取り上げたが、本来、Fグループに分類される。民話に題材を取っている物語には、社会の都合で作られられた女性像ではなく、地に足をつけて生きてきた、たくましくも優しい女性達がリアリティーを持ってたくさん登場する。やまんばもあかざばんばも、村の人々を思う人間愛を示す女子像となっている。

「とつとぎのとっかえっこ」のネリーは、赤ちゃんのときから、男性でしかも年の離れたバーソロミューと過ごす。バーソロミューはネリーをお守りしているのではなく、共に楽しい時間を過ごしているのだ。性も違うし年齢も大きく隔たっているにもかかわらず、二人の間には互いを認め合う友情が育っている。二人の間で、性別はまったく問題ではない。“女の子らしさ”など超越した、ネリーのインターアクティブなコミュニケーションが心に残る。異質性を受けとめる女子像である。

「三つのお願い」は、ノービィとビクターの異性間の友情を描いた作品である。日本において、女子と男子が親友だと言い合えるような関係がどのくらい育っているだろうか。性別が、男女の友情の壁となっていないだろうか。それぞれがそれぞれの性にこだわっているところでは、互いの自然なコミュニケーションは生まれにくい。日本の子どもたちのコミュニケーションを豊かに広げるためにも、ノービィとビクターのような友情を知らせたい。ノービィは、友情を育む女子像である。

「ちかい」のヤミーナは、特に新しい女子像というわけではない。しかし、生命の危険にさらされながら動物の生命を守りぬくような役は、これまでほとんど男子が担ってきた。その常識を破って、ヤミーナが登場したわけである。ヤミーナは、生命に目覚める女子像である。

「プラム・クリークの土手で」のローラは、速い流れの川に入りたいという欲求が女子にもあることを自然に表している。彼女はその欲求によって行動する。臆病で慎重で賢い女子は、絶対にしないような愚かな行いである。そのために、溺れそうになるが、そこから戻ったとき、ローラは水の恐ろしさや人間の強さを知ることになる。ローラのように、行動することによって自然と向き合う女子像は、女性のスケールを広げる魅力を持つ。

「月夜のみみずく」の「わたし」は、女の子がどのように扱われたいかということを訴えている。兄たちのすることは妹もしたいのだ。「わたし」は、兄と自分に対する扱いが同じことを誇らしく感じている。危険なこと、困難なことから守ってもらうだけではなく、女子にも機会を与えて欲しいのだ。冒険する女子像である「わたし」はそう伝えてくる。

「わらぐつの中の神様」のおみつさんは、ジェンダーを越えるような女性像として描か

れているわけではない。平凡で普通の女性に違いない。しかし、欲しい物のために仕事をし、自分で手に入れようと行動する女性である。現金収入を求めて働くたくましさの仕事に注ぐ真心に、先駆的な仕事を持つ女子像を見ることができる。なお、その仕事ぶりに人間の魅力を見出して生まれる愛情も、書き手の人間観を示すものである。

おわりに

以上、現行の小学校国語教材のうち、文学教材についてジェンダーの視点から分析を試みた。ここでは女子像の分析にとどまり、同時に行うべき男子像の分析には至らなかった。また、小学校国語教科書が平成17年度から新版に変わるので、新しい教材の分析も行う必要があった。しかし、17年度版教科書では、現行教材の流用も多く、ここで示したような分析の視点については、特に変更する必要はないように思われる。これまでは、国語科の教科書教材の全体を対象としたジェンダーの視点からの教材分析はまったく行われてこなかった。それが何よりも大きな問題であり、教科書編集や教材研究において、今後、ぜひ意識化しなければならないことである。本研究は、そのためのスタートを切る研究のつもりである。

ここで取り上げた教材はわずかに25編だが、すべてがいわゆる児童文学作品である。教材を変えるためにも、新しい児童文学の登場に期待したい。教育界から児童文学界へ、新しい女性像を提出する児童文学の登場を、要請し続けて行きたいと思う。

【注】

注1：「隠された（隠れた）カリキュラム」…学校の中にある、教師の言動や教材、生活環境などに潜んでいるジェンダー・バイアスが、子どもたちに影響を及ぼすこと。

注2：福岡市保健福祉局子ども部「青少年に関する意識と行動調査」…数字は、「小学生の調査結果」より引用したもの。調査対象は、小学校5・6年生452名（創育社『教育アンケート調査年間 2003年上』）

注3：牛山恵「小学生・中学生・高校生のコミュニケーション意識に見られる男女の差異」（都留文科大学『国文学論考』第38号：2002年3月15日発行）